七艸集　子規稿

無何有洲

七草集

全

IV.B
3-1
マ3

特別

別置
3
1343

七艸集　子規稿

獺祭書屋圖書

七艸集　子規稿

金龍観音

木製芙蓉

吾妻鉄橋

枕橋墻林

七艸集　子規稿

八百ま川

まつち山

山谷堀

三めくり社

牛頭祠前

長命寺頭

長命寺

秋葉社

七艸集　子規稿

桜の廻廊

佐久良のトンネル

さくら花傘

桝乃やくら

蘭之巻

フヂバカマ

東北大學圖書

蘭之巻

莞爾少年 著

墨江僑居記

戊子夏。從例得暇六十餘日。學友多歸鄕。留者。或在牛込。或在王子。而余則寓于墨堤月香樓。同居者三並藤野二氏。樓在墨堤第一曲処。據長命寺鄰牛島祠。堤高一丈。掐与樓齊。車馬沸喧擾。堤有櫻梧檜櫧數樹。然隔其間以濤瀾之渺漫之。而樹間且可見江流之半。余病腦。眠遲起蚤。欵而未換衣。先開窓而望。曉風吹霧。前岸不可辨。渺乎無際。心亮清爽。不堪久視。乃倚椅讀書。未曾知病在身也。倦則回頸擧目

妙〃雅〃邁〃加此字可　意下

妙作佳作

糕怨餅之談

三藤二氏同寓于東京之理刪為佳　冲

江風分涼。白帆出没樹間。熱気不減都巷。而覚有水辺涼意。

長日漸暮。涼月在水。四境寥寂。隔江聞鐘声。於是乎悠然陶

然。身在羲皇以上矣。居十数日。而暁風夜雨見尽奇。而[illegible]

毎一不適之意若夫都人士来此

也。独書所得過所期。而未本寒都人士遊賞江上勝也

地而折花観雪以為天下之勝所者自不可知也

[illegible]紅塵後白雪辺間窓之友五六。時乗小艇訪余

寓。相延上楼。當奈以櫻花湯。當果以櫻葉[illegible]糕。共語墨江風

致。三藤二氏亦由京遊。余嘗説前人未得道之趣。而[illegible]

増値傾之友留京者。遍遊四方。而三藤二氏亦尋去京。余寓

若[illegible]之交[illegible]許幽趣[illegible]往于

寥也。知斯者又十餘日。形与気和。心与境合。[illegible]而行[illegible]

自是無剥啄之声。乃閑行探勝。社寺尽詣。田陂備究。

輪扁句難解　蓋刪為可

文語無清語自有別　故洌字工字刪為佳　冲

清爽可想

江上映景写得亟真　舟無人相併不得分言　冲

而実小[illegible]始悔前之待人[illegible]今之独[illegible]

言[illegible]所得愈多。所得愈多而所書[illegible]不可尽[illegible]

[illegible]有敢存焉者歟。

自有得于心而筆不可尽焉

記小景一

早起出竹扉。一堤涸無人。白霧掩江上。渺茫如大海。孤鳥出没　忽飛

行無而人[illegible]渡舟横江[illegible]不知所行。帆細少時。対岸漸現。

瀬徐上。波不動。涼気襲肌。一天風死。今戸之街。待乳之岡。猶

如眠。霧中舟与人皆往来画裡。偶得好句。敲推未成。

紅暾上東。四面霧全消。遥見富山突兀。掛金龍塔梢耳。

前二句加如字後刪如字佳

耳目之会楽即心之喜楽也非別物事別可

記小景二

椿前堤上有小亭行客所憩処也日僅過午烈炎鑠金堤上
堤上茶店喚烟且嚼氷涼風似水揺樹葉披幃幗如雨蟬鳴
解纜者相逆笑者白帆逆注也柳絲蕩水気涼者潮
乗築也如鄰馬三四涼水而飛者非是学生漕小艇耶如是
眷十余向空而翔者非是大紙鳶截水波耶色与目喜芹
楽而喜楽与心應捌併無一譴遂然晴撤我忽有客到自京
市。市塵中上卸擔謂余曰今日都巷酷熱如焼馬牛喘
于道路暑爛蒸若于公衙直汗使市人有堕落地獄之想

無限餘意使後者描出于胸裏妙也

一氣到底勝於前文

聖字刪可

六有餘音嫋々

焉。

記小景三

我無視墨江之光景暁光朗晴空無一塵清則清矣未如暮
色明媚也無所見而与万化冥合也炎陽無幾将落水光激
灔金波射人目泼烟抹林籠水揺曳櫻柳之間連
延鉄橋之上芙蓉峯色蒼然如画彩雲絢爛繚繞其上頭西
顧東望玩弄不措漸紅消漸淡極而暗瞑目直立不能去步
時。

△送而到枕橋則還、蓋墨江之風光北窮于梅祠、南尽于枕橋。北則洸寂、只堤与流睽、不免蕭索。自庵至枕橋、最清麗。只覺行人稠、繁紛而夜則朗然。已送而還、夜色

記小景四

有朋自城中到。未必以晩帰、必以夜。而余必送之。而実賞夜景也。彼至枕橋而不余亦到此而還。時集視衛。臨岸掬水而忘登間之懈者。見汀波洸円。而遊雷燈筆光輝。潤水風生波而忘声。於是乎忘名忘利。忘地進京城是身在人間徘徊而忘行。値立而忘帰。夜深而眠暁進而起。忘初陶中不復寸塵夫人欲忘而不可得。而所思尽見於夢。其移也亦不能忘。覚而猶記之者。以也有不能忘者也。余今無一事一物不忘者。燈、月影在林、水波、天地空濶、徘徊而忘

行、直立而忘之、名之与利忘于懐、物之与吾忘于世、既就寝、墨江夜色、彷彿于目睫、終不可忘也、

而此寄乎心而不能一瞬忘其風光之美可以見矣

鄭作秋夜往

此不可删

欲連四則

嗃作辨可

作画題

無篇執無在風致可喜

記小景五

読書至半夜而眠未催。蚊声如雷、不堪独坐。乃入蚊幮、微睡結夢。鐘声渡水、嗃々。犬吠隔江、悵々。風声遠而微、漸来吹庭樹。枯戦摇動、潮細浪打岸。忽然鳥起。漸近至窓前。声铜嘹嘹。巧甚知其漁歌。櫓声咿軋、如雁鳴。使人情悠然。而聞窓。江月印流。前岸如烟。只見一燈浮波而去。

記小景六

萩之巻

見晴好而不見雨奇。則知濃抹之美而不知淡粧之妙也。墨
江之記，亦不可無雨景也。夫天陰惨怛之日。隆岸頭之樹而
独擅眺望之奇。自以為墨江是我有。忽見冷風颯然至。雨絲
横吹。柳絲倒飜。江波濆白。塘樹駭緑。待乳山模糊在有蒼翠
渺歟淘歟。恍然米家山也。復十一葉篇師一葉。而幾林露諸
抄者是摩詰詩中畫也。於此景致非米不可画。非王不可
賦。然相誰能得傑有米筆与王詩哉
真士之圖与作家之津。恰如隅塘野之景。水流濁而急
者。蓋為或洗市井万丈之紅塵乎
蕪村

十四首篇々皆圓足以尽墨上風光乎常游墨江者数回無一句可記涂負江神今得君紀述足補予不逮幸々坤

萩之巻

得暇三旬久閑栖墨水頭　獺祭魚夫稿

敲[illegible]林際寺捲箔水辺樓

第一首正是墨江詩可滴坤

墨江僑居雑詩

同一墨江耳而十四律一首々々異趣

詩思之富可以想也

竹

[redacted]簾水上樓[illegible]
何処[illegible]断谷坡[illegible]

[illegible]寺

一節[illegible]遺迹[illegible]慨時[illegible]
探古　遊通[illegible]春光

手今有白

其二
[redacted]茅屋長堤下

[illegible]横十寓[illegible]百處清
[illegible]洗耳[illegible]
[illegible]護鷗眠

节

[illegible]風順利舟行[illegible]塵埃迹[illegible]東馬声
陽江

[illegible]相映水中明
茂林[illegible]

題字恐々妥

竹

何等高興　竹

其三

十里長堤最好辺墨江画景臥雲烟独将白眼看浮世
遥望紅塵漲遠天伸脚擡腰導引咏花嘯月是因縁
焼丹煉汞見難得一日清閑一日仙

漫江夜景宛然如睹　竹

其四

地静人稀物外情史書読罷独閑行夜深瓜外疎鐘近
月暗江頭遠樹平浮水一燈覚舟往過空群火見橋横
荻芦葉戦潮将上涼味沁肌徹底清

欽羨移　竹

其五

[illegible]江夜色新独倚行欒来頼電細銀索木蓮嶽
王枕橋頭
哀絲豪竹迭起

頸聯亦佳　竹

月走金蛇竹屋津車馬西三過公子舟艤多少載佳人
因書十巻窮生計破帽敝衣守赤貧

其六　清絶高雅　十竹

萬丈[illegible]住高宮我[illegible]閑居繙巻頭[illegible]柳[illegible]多福性
澹風明月苦吟身[illegible]顔客思親
衡門[illegible]學成後[illegible]共賞故園春

陰韻穏押不見可見　竹

其七

病肥[illegible]不得四翔[illegible]
人間名利似吹毛[illegible]天下文章四海[illegible]
[illegible]五層塔[illegible]八朶蓮開雪外高
咫尺有斯小仙境荒唐休探武陵桃

坪批

冒頭稍高　竹

第二句実艶　竹

其八

聯北涯看秋新雨後　安房　名利

何嶽題名書午眠正熟風吹枝

霖雨纔晴収復高流岳見

江濤潤清和江壽

景光風情響纓占

書生　意商　人世　只形労

其九　近

蓬戸竹籬境遇新涼居逾月与鷗馴　天

墨水風光 江水南流劃市塵

濺雪燈有数鬼燐満地不知用樹苔終生敢作読書人

西隕催兵氣

閑来瀉了　又行樂　寶壽山　江頭独養眞

一夜有流星大如月

第三故又

其十

金龍山暮鐘催観音　百人

花燈照浪去

斯字恐無実紋　竹

西落可正　坤

巧而穏　竹

其十一

十里烟火雲来噴　清

玉碗珠盤満天遊

偶無書生消息仙女幾度驚然唱

同夜又為烟火戯

樂在其中何厭貧一裘一葛護吾身

同居同宿　坤

楼上清風會散人

烟雲長江朝色静

桐陰明月遣知己

其十二

半宵独坐

夜光岑寂闌落燈花聴羅鯖

寓臨黒江　沱

月　衝真土寺

江流波山日斜鳥雁縦横

中有一生過廣世山常与白鷗

画閣紅燈

王孫

白

雄壮　冲

頸聯似張船山　竹

一結極穀展景　竹

其十三　冲

武野将窮無双牛島頸儒岸徹清風番樓眉峯下眺八州峙　誰攬勝景入斯

墨水斜廻九郡流　容気空期千古業　病躯徒抱半生愁

拗書未廃彫虫技　独賦雲烟囊底収

其十四

長堤曲処墨江隈　一月僑居世事灰　有友共乗小舟到

無魔曾入破廬来　童拏璃盌夏氷滴　婢捲湘簾画景開

但厭斜陽全没尽　耳辺隠々蚊雷

二州橋観煙火戯

綺閣画楼挟大江　二州橋下舳艫重　雲晴霄漢知何竃

弄曲故作花　竹

本草博士　竹

蜂絶辺庭亦是蜂　天上雨花地懸月　水中出虎火生龍

無能堪笑葛玄子　含飯徒然作吐蜂

墨江流燈合　燈踏鴟形

中元過数日濯上帚　祭儀新　燈映疑浮鳥　水明驚伏鱗

人叶珠玉銀波列星辰　郷想古来依旧　漫天把地神

咏　百株上所見樹木

鮮樹紅桂　鮮樹花　雨鳴半橋銀杏度　砂梢十尋杉直老千歳

尋里櫻連看百株　祠畔蒼楮依皂莢　窓前翠柏接青梧

含風嫋動声如韻　維雨梅肥子黄珠

一剪梅

咏櫻餅似友人

七篇不似前律絶
蓋君長於詩
餘者也乎　坤
詩句意到筆未到　坤

一葉嫩櫻葡餅團香気無涎風味無涎會来喫尽墨堤
春撫腹便々皷腹便々」
歴到鮮脯与菊餐誰比仙丹
我比仙丹猶勧不若衆人勧欲贈於君好贈於君

向島竹枝

[redacted]

郎来櫻樹看花時花散郎去不復来 [redacted] 簾外月明相思夢

櫻花十里一斉開

[redacted]

臨水酒楼眼界寛層々帆影夕陽残南風吹起潮将上

[redacted]

族尽郎船倚曲欄
石竹花涌日影團　暗愁

[redacted] 繞欄水声寒郎家閑說在前岸

縮地鏡中作細看
縮地鏡謂望遠鏡

[redacted] 塘晩風暮地送清涼看 [redacted] 欄外雨如画

對鏡美人学淡粧

[redacted]

七艸集　子規稿

余與兄唱和每一詩成郵送之兄得八首余則僅得五首追懐今時為悵然　竹

萩之巻附録

寄秋谷錬卿求其所贈詩韵

[redacted]

寄郷里竹村錬卿　原八首

君归故国路三千我避塵嚣墨田時恰有森書題暮

[redacted]

五志自命極大千操觚寄硯各為田寺株堪笑法三代

[redacted]

浮生何羨得之無心所江郎　竹

西壁誰知貴九年窗寝焉期南極寿浮生竟是北邙烟

誰心之友世間少江畔思君立暮天

痼疾悩身度廿年小艇江戸雨墨江月陵烟

寄在郷某氏　近狩者以業務之暇学英語

大勢所馳及里閭喜君潤眼観坤輿医工算数百般技

独併米英千冊書見得蟹文通四海学他缺古是三餘

寄武市蟠松　塁前所贈韵

詩出於真情所以動人　竹

請福羨君無釣編依然我独愧沈淪敦能持久真為友

感慨無同倶喪親終夜相思客窓梦幾年孤負故山春

掘川鉄嶺杳難望身隔東都万斛塵

自題写真

一幅写真鏡影同如嗔如笑又如聾塵鞜寰日野人相

掘却塵衣乞丙風廉潔自呼小陶潜迂来免旧阿蒙

栄官高位非吾願不用留名麟閣中

観音峠

余曾遊総之嘉納山山秋東京湾観音峠在雉席之下眺望絶佳今詠焉吟姻運昨

二州相望聴牛鳴総嶺如鍔相嶺迎水国海門潮勢急

群帆総向此間行

余未過横須賀今誦此二句横須賀景致瞭現於胸中有躍々之思

上横須賀来按眺望絶佳

欧船米舶多少房嶺絶山淡濃雲過島辺有影鳥飛天
際無蹤

鎌倉

鶴陵祠古旧鶏棲宝刹寺荒繞短垣金殿玉楼何処在凄
風苦雨数家村

自金沢到鎌倉山中口占

峭巌壁立不看家沿澗従山一径斜昨夜合歓結何夢
臺陰撩乱玉簪花

絵島

絵島寶泛一望不満坤

曉登絵島気佳哉山上古祠祀辨才老壓玲瓏吐楼閣
巨鼇依約負蓬莱汀洲潮会開還合岩洞波狂去又来
驚見旦工機匠巧花螺為鳥蛤為梅

似笑天道士和所寄韻

真理無涯豈易窮[illegible]
閑眼便知天地空[illegible]
名奔利走真堪笑独與鳥々気更雄

異同

他巻鋏歴服部先生評則唯詩則欽為兄
属余以補其缺余辞之不聴則不省僭妄書
所見於欄外瑕瑾唯命是俟

竹村鍛妄言

七艸集　子規稿

をみなへしの巻

七艸集　子規稿

坤不解国歌
不敢妄言也

女郎花の巻　〔illegible〕羅さ米

梅のたよこゝろにつゝねたる

夏日向島閑居

梅の木の下枝をあらみに帆〔illegible〕

樹のまに川ゆく真帆の〔illegible〕

千早振神の宮居は榊葉をおきみし仰ぐ我すゝめこれ

五月雨の頃ある

五月雨に四方のながめも〔illegible〕堤をゆする隅田の川波

〔illegible〕の川〔illegible〕

〔illegible〕

〔illegible〕田の川の〔illegible〕

さはらたに夜は[illegible]やなきは五月雨の聲高くたてゝ[illegible]

霧たちこめたる頃なる　霧の中より[illegible]

[illegible]は遠くゆくこそ[illegible]見[illegible]

[illegible]の[illegible]りの[illegible]の[illegible]にてわかぬまでに霧[illegible]

五月雨の頃我学校の水泳場にゆく人はまれにて[illegible]

五月雨にかくなりて墨田川水の濁にかゝるなりけん

五月雨降霽

[illegible]の[illegible]も[illegible]

雨のけはひなき秋日を見て[illegible]

雨はれて[illegible]の川[illegible]月の[illegible]

の[illegible]に[illegible]る月の[illegible]

河納涼

川ぞひの風ふくかたに打見れば河のたゞ中に[illegible]

[illegible]せて帆を[illegible]舟人の水棹の[illegible]夕涼みの[illegible]

夕ぐれに[illegible]を立ち出でゝ[illegible]川の[illegible]

[illegible]ふ[illegible]る[illegible]の川に夕[illegible]

日は[illegible]れてまだ[illegible]夕[illegible]み[illegible]へすゞしき風に吹かるゝ

さながらに夕の風は涼しきを[illegible]

友の[illegible]まかれど

[illegible]の[illegible]に

まれ人の[illegible]草の[illegible]ちからの[illegible]川風

[illegible]の夜の[illegible]ひは[illegible]せて[illegible]に[illegible]て[illegible]

七艸集　子規稿

居をおとなひける帰るさに同じ舟にのりて漕去りければあと
を送りてよめる

帰りゆく舟はなかなかに水の面にあやしくのこる船の跡哉

都鳥を見れば何となく昔の事は思ひいでらるれば

ゆかりの名にきゝしをなりぬ都鳥いざこととはん吾のかみの事

桜の餅をあきなふ主人に代りてよめる

花の香を若葉にこめてかぐはしき桜の餅家づとにせよ

わきて他の峯の富士の山のいたゞきに雷雲聳ゆとなりけん

いはふ春の花をおもしつらねけん

はれやかなる桜ばい国のいろをこれまでと見えはべる

流燈會

ありしやる火影のうすくなるまに我身に流る罪やけぬらん

磐梯山はさけて村里のはくさの家をうしなひつると

きくからにいとゞあはれの催しければなん

詠人先世のまがつみにやあひつらんあまのはらをも渡りけり

いと大なる流星の光をひきて飛ひ去りしを見て

よめる

ひかりつゝ飛び行く星の光は尾をひき星なるすへらこそ

星に入りて消ゆ事をもすてゝゆけば宿は枕もとに

たましひと光をともしてゆくらん

袖ハぬれても人をなきさる所 叩の音の手向にせん
秋葉神社にまうでゝ
夏なれど秋葉の杜の下かげに涼しく風そ過ぐ
袖ハをれふみしく青柳にも吹つゝけむ
青をひらけるとする時は
隅田のあたり
住ぬ田夫人より四五日のひまを
遊ひてハ
あふみ海や山
縞の島の

旅衣を
秋の
数ならぬ
世の
年一ッにて本の下ニ
暗
秋の
数ならぬ
地ハ
秋の けふの長谷寺の鐘

七艸集　子規稿

○何となく風の音かなしうきこえ候の御気色に秋やたけなん

花やし野の七草をつまんとて出侍る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

咲き残りてのなる若き女のうちしれを過ちて残りたる

との色やと見る何れは萩を咲くとなんいひける

糸萩にさうらふ秋のたち姿て一花衣はなに花茶見らむ

[illegible]

女郎花や[illegible]親の有[illegible]つれた

[illegible]

学校の休暇の延いされも九十日は月に見る名残桜にすまひる

墨田川の月をみること三たひまでくもりたる月をながめて

戯れに畫をかきて女の許へつかはすとて

[illegible]

きこえあげて誰に見せんものをふつたなしと思ふ水茎の跡

此の頃は何となく氣のむすぼれて人に逢ふこともいとはしき

時なんいふぞ世の中をうしとのみ思ひつくる折ふし故

郷よりの[illegible]にまじりて[illegible]

によめる

思ふ我身は[illegible]世の人は[illegible]

[illegible]

牛島神社のまつりの日よめる

[illegible]

[illegible]

[illegible]思ひの[illegible]人の[illegible]

[illegible]三百[illegible]都の[illegible]

[illegible]思ひ一日も[illegible]

七艸集　子規稿

都に御ぐんといふ室つる

思ひきやくまでなれし墨田さんさい帳のたよりなんとい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家を立出る時ある人子がりを贈りて

同し樹の陰にやとるさきの世の契りと思へはなつかしけれ

あふ事はかりの陰世の名もすてぬるともえこそしきおもかけ

寄墨田川名所戀

秩父なる峯より出る墨田川かきりしらぬは思ひなりけり

[illegible]

鐘の音にさゝめくも浅草やわれのおもひのつきぬなりけり

[illegible]

真葛原かねのはらとまて吾に掛けかはらしいとの我身

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同し隅花ちくちるにあふ人のひまなく物を思ひける哉

[illegible]

七艸集　子規稿

七艸集　子規稿

尾花のまき

芒乃まき

真棹家丈鬼

毎年夏やすみとなれは二ヶ月餘の休暇を得るものゆゑ都にありかぬる
ほとんど(?)なく故郷へ帰り又他国へ旅立つ事多かりける
今歳は故ありて松山へも帰らす又故郷の信を寄せて草枕の
旅をもせすゆるしなく東京向島(?)の町中の花を[illegible]
此上おかしからぬ(?)本意なけれはとて向島の山本(?)の
かりそめにすまひするをは[illegible]の桜上より川の面[illegible]
[illegible]庵を出つゝみにのほれは川一面にふくらけ
富士の山[illegible]くもとより其[illegible]のなかれをなかめ

自他を[illegible]りて[illegible]

七艸集　子規稿

世の塵を水に流すや隅田川

書庫[illegible]して[illegible]ふみの画かゝり

[illegible]

[illegible]

海瀬や篠[illegible]島の[illegible]

夜中と哉

[illegible]汐満ちくるゝまひ

木の伝ひ[illegible]帆かけ舟

川[illegible]

[illegible]

面白し

生きて

、凡や霧の中[illegible]帆かけ舟

[illegible]の社[illegible]

[illegible]

七艸集　子規稿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霧[illegible]煙[illegible]墨田川

[illegible]

[illegible]や向ふの岸は花咲いたり

片端ハ山に[illegible]天の河

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]待乳山ちらりと見えぬ青い簾

[illegible]

[illegible]

獨人と待てやさびしい納涼哉

[illegible]

[illegible]

七艸集　子規稿

七艸集　子規稿

[illegible]

[illegible]

夏川の音[illegible]行く[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]三囲へ

帆の風を[illegible]

[illegible]

富士の[illegible]かむるあそこた不二の雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桜[illegible]

七艸集　子規稿

牛御前

吾妻橋

牛嶋神社祭礼

はいかい [illegible]

言の葉 [illegible] 俳句の [illegible]

[illegible]

[illegible] や [illegible]

水滸傳 [illegible]

行けば [illegible]

花屋敷

花屋敷 [illegible] 秋の草

雪の中

隅田の柳へまかる [illegible]

我住める月香楼は寶壽山長命寺境内にて [illegible]

長命寺は [illegible]

境内に芭蕉翁の「いざゆかん雪見にころぶ所まで」と

いふ句を彫りし碑あり [illegible] 雪見の [illegible]

我も俳道に志す身の [illegible] 妙なれ

雪見にも [illegible]

大学 [illegible] の故郷へ還る [illegible]

新の [illegible]

東 [illegible]

桜の [illegible]

七艸集　子規稿

我幼少の時より大に音せられし老姫のこまやかなること
きゝて涙にむせびける

七艸集　子規稿

○添井の物れて地ふ亭す瓜比花

言の揚るる人流然含むふ七種の選善きを撰

[illegible]の室ふやと花さく咲

会津の磐梯山破裂して人の死亡せしとのおびたゝしく

幸ふ遁れしのひたる[illegible]負傷しく共焼けたれ

或ハ兄を思ひするふ中の又大地ふハ赤首みの流れいりそ

されて死亡多く溺れ溺し[illegible]新しくしとお新し

大垣の水を以て磐梯の火を打消すかなるのハ磐梯の火を

以て大垣の水を乾かしなで京生のしとのもよかくす

きうなんとのと思へと造化の配剤ハ心ふ行ぬれぬ

我思ふやうにもあらぬここそ

是洲子丸

[illegible]

七艸集　子規稿

あさかほのまき

蕣之巻

文中片假名ノ処ハ詞、平假名ノ處ハ節ト見ルヘシ

夢幻

無縁癡佛作

次第「春暮れかゝる櫻狩／＼水上の花やたづねん

ワキ「花の都も春のくれ。めづらしく霞うき草も。水の由

の川の邊りのはなも櫻の花も香の。さかりは過て今は

ものの芽ばりあらく随ひせず。積る春も〔illegible〕

なき〔illegible〕くも。とも昔の思ひ出られ

〔illegible〕

ワキ詞「コレハ一處不住ノ書生ニテ候。我コノ程ハ西洋ノ國ニヨ

経廻りし。只今此東京に帰り着きて候ひし。久しくり墨田ノ花ヲ見ズ候程ニ。向嶋ニ行カバヤト存候。

「春の夜の夢をとりなる手枕の橋打渡り過る里は。花ともいふの香る思ふ小梅のほとりす三囲や竹屋の渡を後に見て墓の浮世は牛島は長命寺に着きにけり。長命寺にもつきにけり

「急キ候程ニ。是ハいや牛島長命寺ニ着テ候。コヽハ我嘗テ住ミシ所ニテ候程ニ。一入ニなつかしク思ヒ候。アラ笑止や昔ノ家ハ皆顛レ。小サキ野守ノ小屋ノミ残リ居リテ候。

往来ノ人ヲ待チテ。詳シキ物語ヲ聞カバヤト存候。

「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして。

「イカニアレナル川辺ニ見ユルハ。只一本ノ遅桜ナルガ。実ニモ見事ニ咲キ揃ヒテ候。

「いろまり色香のめでたさよ。いで一枝を手折らんと。あの樹の下に立ちよれば

「ノウノウ暫シ待チ給ヘ。

（とは申せ候らんも……）

「御身ハ如何ナル人ナレバ。ツレナクモ我ヲバ止メタルゾ

七艸集　子規稿

春ハコノ処ノ花守ナリ。花守ナレバコソ此ノクレ。花折ルベカ
ラスト書ケル者ヲ。ツレナシトハ御身ノ事ナリ。
実ニ手折ルコソ無情ナレ。思ヒトヾマリ申ベシ。扨此花ハ
如何ナレバ。斯ク花守ヲ置カレシヤ。若シカラズバ御物語リヘ。
仰ニ任セ始終ヲ物語リ申サウズルニテハ。昔ハ一昔
ココニ櫻屋ト云フ店アリシガ。櫻ノ餅ヲ商ヒテ。百年アマリ
賣リ續キタレバ。自ラ此地ノ名物トナリテ洗人。然ルニ今
十年程以前ニ向屋ト云フ店ノ此アタリニ出来テ。櫻ノ餅ヲ
賣リケルニ。新シキニツク世ノ[illegible]テ。櫻屋ハ日ゴニ衰ヘテ
仆ヘバ。花子ト呼ビシ一人ノ娘ハ。コレラノ事ヲ愁フルノ餘

リ。終ニ病ノ牀ニ臥シテ失ガ。今ワノ際ニ人々ヲ招キ。我
ミマカラバコノ処ニ埋メ。櫻ノ木ヲ一本植給ハレト。
「それ浅名なりの言の葉ぶ。[illegible]月の。備つる
[illegible]待たで西ヘ行く。浮世の様ではかなき。
人々其遺言ノ如ク行ヒシニ。櫻其木ハ年々見事ニ花ヲツケテ
咲。左レバ櫻屋ハ益々衰ヘ[illegible]
[illegible]僕ノ中ニ[illegible]コレモ世ヲ去リ申シテハ。又不思
議ナルハ。其頃ヨリ向家ノ店モ自ラ人ノ脚絶テ。ツヾイテ
コヽヲ立チノキシカバ。今ハ寂シキ里ト変リ果テ。花見ル人モ

七艸集　子規稿

世の末子の。清き心のます鏡。うつらで定まぬ姿かな

シテ「我身もここに

すゝ田川の

地「我身もここに

田川の。花のゆかりの其人と。聞けば涙かなかなかに。思ひぞ出づる春の夜の。あらはかなの

篇二

ナリテ廿人。

ワキ詞「御物語ヲ聞ケバ、只ニ歎キヲ増セシナリ。

我等モ櫻屋ニ假住ヒ（ユカリ）ガ。只今甚

旅路ニ

シテ「再ビ尋ネ来リ。御物語

かくまで変る浮世とは。なれぞ波

の隅田川の。濁りし

契りやかな。比翼の鳥連理の枝。遠き末の為のとて

の山の山人と。

詞「日モ傾キ暇ヲ給ハレ

実ぞ浮世の

花ハ夕陽ニ

槿花一朝の栄

足るを知るべし

山人と共に

梢にうつりゆく花に風。雪と消えて木の下に。つもれる花を

恨むなれ。恨みやなぐさめくと。花の陰にぞ泣きぬる

ワキ詞「アラ不思議ヤ。

櫻ヲ打ツ

打廻リシテ泣キ振舞。実ニ心得ヌ事ニテ候。

七艸集　子規稿

ノウく此身ハ如何ナル業障ニテ。カリハ歎カセ給フラン。
シテ「何と答へもなぎさこぐ。あまの小舟のうき〳〵つゞし。沈み
もそゞろ此身の果。浮む瀬もなき我上を。今はいつ迄
我こそハ。櫻屋花子の霊鬼なり。
同音「げにげに持る業に絵ヒし。御身ハ心しも業は。徽菩薩女
婆ヲ夜入テ。我身ノ上ヲ物語りけり。
ワキ「さては花子なりけるよ。いやとしすんとすれバ
シテ「逐さゞる　地「姿は如何の面影ほのかにしらずなく。今は此世ありとは見れど箒木の。
かすかに魂の見えかくれ現れ。きゆれバ思
妄執の。夢路に迷ふ有様を。あはれと思ひ弔ひ給へや。

地「袖うちはらふし清兵ながめし春の梓弓。行きて帰らぬ駒の。不老門前日月遅し。月も尽きけり。花もちらし

流れの一樹の蔭も。他生の縁と聞く物を。
花も見ハ紫家から。
嬉しや花の哢。あら面白と見しをそ。さもしき歩
の浮世。みれバ今ハいくつ流る水この。おそれ。うらみ
かすりれ来る者ハゆくの如くと観ずれど悟らぬ事
を愚なる
シテ「花ちりはすゝ。風にやるのいなれバ知る。我る樹に戻る根をバ。
地「ふりしはなき仮の身の。思へばはかなき有様の我は。
過ぎし春も北日前。花ちるも花咲くも。ゆくけどし
白雲の。つきせぬ隅田の花堤。風に動かす花の底。

七艸集　子規稿

さかなには物ふ流儀ぬく。人を送り。人を迎ふや向じまぬ。
青柳の物に蔵。花を実にしたる櫻の餅を。買ひし世捨
人や買ひ求めて人と共にむれと人は皆。よそ向ふ處は必ず栄え。
櫻は花のなき櫻屋は。花をむねの何ともなし。まことやし
名ふさへかわりぬ。此にもありし花は散りて。落ちにし水の泡となる
此ふ流儀消ては。あさはの上に。人をあはれと都
鳥我は昔を思ひ出すり。ふれぐてし緑髪のかつきて
よらぬ思ひをば知りたる人や在原業平。我は臣の歌は海なり。
杉は日ふ栄ふ遁れ。隅田の川に春風は。昔の浪を寄りや
なしかと筆留ぬ。都鳥は。いつの不参なかりん。

妙

ワキ「根塵同源縛脱無二。識性虚妄猶如空華と。佛を説ふ
世の人々ひとりやまれ。花を見ては塵なり。開くと見れども散つる花
を。いづれ真なる法なりとや。我が身をや勤めん。暁を知るに
林もいづれを夕をとやふべき。生を生と思ふにあらず。死も死
なりと知らざるべし。檮りそれは。固すれど本来無一物なき物を、
無明の酔にまかせして迷ふ心を笑止なれ。
シテ「まことに尊き御法かな。智慧愚癡通為般若と聞く時は。
ワキ「我等も佛なりけり佛やならまし。
ワキ「知るやいかに。蜉蝣も天地ふよすがなく。
シテ「渺たる蒼海の。一粟なりと見る時は。

七艸集　子規稿

ワキ「はかなき人の命の。
シテ「うらやましくもかぎりなき。墨田の川も
ワキ「流れては生死の海法の境なく。
シテ「四河入海同一鹹味。今は恨むべき中もなし。されども
思ひの中には消えぬ煩悩の焔の残るはの花の。赤き
色こそうらみなれ。いざさらば。散らずも散らん散らずとて。
誰かは訪ひ来るべきと。
櫻の陰に来りけり。見ればさきまさる
めし桜の花の。空にひるがへり。散りての中に
有様は

ワキ「南無幽霊頓生菩提。南無幽霊頓生菩提。
と念誦の声の下よりと。
シテ「ありがたや。今は思ひおくこともなし。さらば
地「といふかと見れども。姿は消えて
うちなの。
真如の月も。墨田の波にゆられゆく。ほのぐらく
ありあけの。ひがしぞらそいとどなりにける。けしきなりけり
家はなりにけり。

葛之巻

假譃曲訛迹櫻餅来歴殊有姿態感服々々　漱石

萱の巻

野暮の笑（文字）の星霜ノ間に

~~古~~人ガ用ヰル所ノ言語ハ其意義ヲ変換スル（モノ）甚ダ多シ（之ヲ是レ）

古人ノ風俗習慣ノ変遷ヨリシテ来ル者ナレバ言語ノ変遷ヲ知ラント欲スル者ハ吾人ヨ

~~白昔ヨリ今日ニ至ル迄ノ言語ト[illegible]ヲ比ベ同[illegible]意味ヲ異ニ~~

類ノ歴史往ニ其風俗歴史即チ風俗習慣ノ変遷ヲ知ラザルベカラズ（例ヘバ）

~~杉茶進[illegible]言語ノ経過ヲ知ラシメ我等ガ昔時ノ風俗習慣ヲ~~

~~開化ノ度進歩ノ有様ヲ知ルニ足ル之ヲ知ラント欲セバ其文字ノ~~

意義ノ変更ヲ見ルモ亦[illegible]漢字ニテ簡ト云ヒ箭ト云ヒ籍

トスル如キ皆其竹ニ从フ者ハ何故ナルヤヲ知ラント欲セバ往古支那

ニテハ竹ニ字ヲ鐫リテ書トナセシヿヲ知ラザルベカラズ然レドモ今日用ヰル

所ノ簡箭籍ノ如キ敢テ竹ヲ以テ綴リタル書類ノ謂ニ非ズ乃チ知ル

説キ得テ明晰
所謂麻姑痒ヲ搔ク者

此文字ノ意味ハ今日ニ至テハ全ク一変シタルヲ「国語ニテたゝかふト云フハ
戦闘ノ意味ナリ　固ヨリ此語ノ起リハたゝきあふト云フコトナルベケレバ昔時
拳闘若クハ竹棒杯ヲ以テ打チ合ヒシ頃ニ云ヒ出セシ者ナルベシ　然レドモ其
後戦ニモたゝかふト云フ語ハ刀剣弓矢ヲ以テ相傷ケ相殺ス場合ニモ用ヰ今
日ニ在テハ数里ノ遠キヨリ大砲ヲ注射スル場合ヘモ亦たゝかふト云フ語ノ字
義ニ含蓄セラルゝニ至レリ　其原意ヲ去ル益ゝ遠シトモ云フベキナリ　戦ノ
字ノ如キモ亦戈ニ从フヲ以テ知ルベシ」又出帆ナル字モ昔ハ順風ヲ待テ舟ヲ
出セシコトヲ云ヒシガ今ハ其意義変シテ単ニ船舶ノ港ヲ
帆ノ力ヲ假ラズ又蒸気船ノ出帆ト云フ字ヲ用フルニ
至レリ

能ク穿テリ
猶モ亦真珠
ノ如シ

吐の如ク失ト云フ言語ノ起原ヲ知ルニハ昔時ノ有様ヲ知ラザルベカラズ又然ルモ一方ヨリ
云フ時ハ言語文字ノ意義ヲ知レハ昔時ノ有様ヲ想像スルコトモ得ベキ
筈ナリ　籍篇簡等ノ字ヨリシテ昔ハ紙ノ代リニ竹ヲ用ヒシコトモ知ルベク
戦ノ字ヲ見テハ干戈ヲ操リ戦ヒシコトモ知ルベク軍ノ字ニヨリテハ戦時ニ車ヲ出セシコトモ
知リ貨財賣買貴賤貧貪等ノ字ヲ見テ昔時ハ貝類ヲ以テ貨幣トセ
シコトヲモ想像シ得ベシ　又たゝかふ出帆等ノ言語ヨリ拳闘棒撃及ビ
順風ヲ假リテ始メテ航海セシコトヲモ推知スベキナリ」又東京ニテハ甘藷ヲ
薩摩芋ト称スルヨリシテ此甘藷ナル者ハ初メ薩摩ヨリ廣マリシコトヲ
知ルベク今少シ西ニ進ミテ四国ニ至ル時ハ之ヲ琉球芋ト云フ　琉
球琉球ヨリ出ノ
ヨリ来リシコトモ可ク又地理ノ上ヨリシテ琉球ハ薩摩ヨリ先ナリシコトモ知

ルベシ。
此ヲ何トカ想像シ得ベシ又一歩ヲ西ニ進ミテ薩摩ニ至レハ
之ヲ唐芋ト称シ……支那ヨリ
スルヨリシテ其ノ初メハ琉球ニ非ズシテ漢土ナルコトヲモ知ルベシ
漢土……
此ノ如ク言語ヨリ想像シ来ルモアナガチ過誤ノミトハ云フベカラザル也他ニ考証スベク比較スベキ者ナキ場合ニハ杜撰ニ陥ルノヿ多カルベシ故ニ宇宙上ヨリ一国ノ昔時ヲ想像セントセバ能ク他国ノ例ヲ見テ人間社会万事万物進歩変遷ノ一定ノ道理ヲ知リタル上ニテ之ト考ヘ合スベキハ勿論也今仮リニ日本ノ昔ハ少シモ分ラズトシテたくらぶト云フ語ノミニヨリテ日本ニテハ昔ハ手ヤ棒杯ニテ打チ合ヒシ者ナリトハ断定スベカラズ他国ノ歴史ニ考ヘ合セ人間ハ未開ノ世ニ在テハ刀剣モナク況シテ砲礟モ

用意卒ナリ矣

無ク只拳闘抔セシ者ナリシガ人智ハ年ヲ逐フテ開ケ器械ノ発明ハ漸ク之ヲ増加シ終ニハ今日ノ如ク進歩セシナルヿヲ見テ而シテ後始メテ我国ノ昔モ斯クアリシナラント云フヿヲ得ベキナリ我今論セントスル所ノ何島近地ノ地形ノ如キモ亦此法ニ由ル者ナレバ先ヅ本題ニ入ルニ先ダチテ一二ノ例証ヲ挙ゲテ以テ其憑據トナサント欲スル也

大河流ノ泥沙ヲ流スヤ其量頗大ナル者ナリ而シテ其河口ニ至ルヤ則チ滞溜シテ島ヲナス所謂「デルタ」ナリ（「デルタ」トハ希臘文字ノ△（デルタ）ヨリ来レリ蓋シ島ノ形多クハ三角形ヲナスヲ以テ也）其最モ著名ナルハナイル河口ノ「デルタ」ナレトモインダス、ダニューブ、ヴォルガ、ガンヂス其他何レノ河（アマゾン河ハ少シ例外ナレトモ）ニテモ之レ無キハナシ我国ニテハ大阪ノ如キ尤モ其著シキ者ナリ澱河口ニハ

今日ト雖モ非常ニ多量ノ泥沙ヲ滞ラシムルガ故ニ時トシテ舩舶ヲ膠スルコトア
ルヲ見テモ知ルベシ「大凡世界ノ商業ヲ以テ有名ナル都府ハ多ク河口
ニアリ是レ固ヨリ交通（運送）ニ便ナル（三角嶋）
都府モ亦多ク之ヲ謙ナリ故ニ昔ハ海辺河口ニアリシ都府モ「デルタ」ノ
年ヲ逐フテ増加スルニ従ヒ河口ハ段々ト海中ニ進出スルニ至リ今ハ全ク海岸ヲ
離レ内地ニ在ル者少ナカラズ（名古屋ノ如キモ昔ハ海ニ瀕セシト云フ）我国ヘ
テノ東京近地モ亦其一例ナリト
東京近地ニ就テ之ヲ験セント欲セバ先ヅ現時墨田川ノ形勢ヲ見ヨ
其河口ニアル佃島石川島ハ云フ迄モナク「デルタ」ナリ而シテ今日ト
雖モ猶漸次ニ河口ヲ浅クスルノ証拠ハ墨水ノ常ニ濁リ多ク埋地ナル者ノ

増加スルヲ見テ知ルベシ夫ノ繁弦急絃ノ音紅燈翠燭ノ光人ヲシテ
龍宮カ不夜城カト疑ハシムル洲崎モ昨日迄ハ猶寒風波ヲ翻カシ怒
潮岸ヲ打ツノ音ノミ喧シカリシ其浅瀬ナリシ洲トナルニ従フテ
後ニハ其小揚洲ト変シタリ新シク今ヲ去ルコト数十年前ニ埋地シ洲
今日此ノ如シ今日ヨリ以前亦此ノ如クシテ此辺ノ地ヲ成シタリト云フ
必ズシモ證據ナキニアラズ試ニ地図ヲ披キテ深川辺ヲ見ルニ平井新田砂村
新田石小田新田千田新田海辺新田等其他数多ノ新田ナル者ノ重
ニ相接スルヲ見ル蓋シ新田ナル者ハ固ヨリ新地ヲ開キテ田トナセシ者ノ称ナレ
バ其等皆海濱ノ浅瀬ナリシヲ欧州地トナセシ者ナルベシ又海ニ突出ノ
越中島ナル処アリ固ヨリ島ニハアラズ者ナラ其嶋ト云フ名アルハ其地勢

七艸集　子規稿

トニヨリテ考フレバ昔ハコレモ一ノ小嶼即チ「デルタ」ナリシヿ疑フベカラズ此外石島町大島町上大島町（之ニ接シテ大嶋村アリ）等ノ称ノ残リ居ルヲ見レバ此地モ昔ハ今ノ如ク連続セズシテ数多ノ三角嶋（デルタ）ナリシナラン
又伊勢崎町島崎町杯トイフ名称モ昔ハ海中ニ突キ出テシ岬ノ名ノ町名トナリ残リタルニハ非ルカ疑ハシキ也
同ヲ転シテ京橋辺ヲ見ルニ霊岸島箱崎町長島町元島町ハ島ヲ以テ名トシ尾崎岡崎ハ二街川崎ヲ以テ名トスルヲ見テモ此辺ニモ矢張「デルタ」アリシヿヲ知ルニ足ラン築地ノ如キモ今ニテハ町ノ埋地ナリ
芝ニ三島町アリ麻布ニ田島町アリ麹町ニ日比谷アリ市江テ昔ヲ推知スヘキ也　本年議事堂建築ニ際シ

日比谷ノ地質ヲ調査セシ時ニ始メテ此地ノ海岸ナリシヿヲ知レリト云ヘリ或人説ヲナシテ曰ク日比谷ハ海苔ヲ着ケル木ノヿニテ（俗ニひびト云）昔ハ入江ノヿナリトセバ此地モ昔ハ海ニテ海苔ヲ取リシ処ナリシナルベシト
考シ此事ニシテ真ナラバ京橋ノ日比谷町モ亦斯ル起原ニ出ルモノカ
枚挙ハ中洲河岸トニテモ昔ハ海岸ニテ洲ノアリシ
歟此ナリ又ハ洋人ノ此ニ住居セシヨリ其名地名
トナル八重洲ナル字ヲ填メシモ
知リ易ハ
思ニ由テ見ルモ全カラ
十

七艸集　子規稿

今モ浅草海苔ノ名称ヲ存スルモ昔ハココニ海苔ヲ採リシ故ナリトカ
蒼苔

亦サレド既ニ之ヲ挙ゲテ以テ参考トナスベシ
日本橋区ニ浜町アリ（元浜町アリ又）箱崎町アリ亀嶋町アリ北島町アリ（松島町アリ）蠣殻町モアリ
或ハ往時海ニ近カリシ昔蛎ヲ取リ来リシ所ニハアラザルカ浅草ニ田島小
島北清島ノ三街アリ神田ニ豊島町アリ本郷ニ湯島アリ区ヲ離
レテ豊島郡アリ（東京ノ市街モ昔ハ豊島郡ナリシナリト云フ）道灌山ニ
道灌繋舟碑ナルアリ又西ヶ原辺（日暮里向ヶ岡）ニ貝塚アルヲ発見セリ是等僅少ノ
証拠ヲ挙ゲシノミニテハ假令此辺ハ海ナリシト断定シ能ハザルニモセヨ亦
今日ノ如ク海ヨリ遠カラザリシコトヲ証スルニ足ルベシ余ハ初メニ河口近傍ノ
地ノ昔ハ海ナリシコトヲ論ジ次ニ地名ノ証拠ヲ統ベテ今ヤ東京府ニ属
スル墨田河西岸ノ区郡ハ大方海ナリシコトヲ記シタリ是レヨリ今一歩ヲ

進メテ葛飾郡近地ノ変遷ヲ窮メント欲ス（ルニ）
先ヅ本所ノ隣ニ柳島アリ又庵崎ト云フ所アリ古歌ニハ其名見ユレド
其地ハ分ラズ或ハ云フ請地村秋葉神社ノアタリナリト一本ニハ小梅村
ノ出崎ヲ庵崎ト云フ昔本所ノ地ハ入海ニテ洲崎殊ニ彩シクアリシ
故ニ五百崎ト作リシモ云ヘリ小梅ノ北ニ須崎村アリ（或ハ洲崎モ書ス）
洲崎トハ洲尾ノ義ニシテ深川ノ洲崎ト同意味ナルヘケレド転訛シテ
今ハ須崎ト書スルナルベシ須崎村ニ接シテ寺嶋村アリ又此近傍ヲ牛
島ト云ヒ向島ト云フ（カラ）江ハ此辺モ亦海ニシテ（其後）数多ノデルタアリシコトヲ知ル
ベシ又向嶋ノ対岸ニ今戸ト云フ処アリ塩入ト称スル処ハ往時
城ノ在リシ地ニテ千葉氏ノ為ニ居ル八大傅中尤有名ナル古跡ナリ其

旧説トハ何ヲ指スカ川名ヲ冒スベシ

隅ハ未タ江戸城無ク此近傍ニテハ石濱コソ栄ヘタル土地ナリシヿハ明ナレ氏何故此ノ如ク河口ニモアラス海辺ニモアラズ随テ交通モ不便ナル処ニ石濱ノ如キ市街ヲ生シタルヤ蓋シ城ハ其河ハナリシテ以テノ故ナルベシ河口ヨリ上一里許リ皆水セシハ疑フベカラザルナリ又千住ニ接シテ彌五郎新田小菅新田ノ跡ヲ存スル所アリ或ル人ノ説ニ東ノ旧流ハ千枝ニ流レ中川ト綾瀬川ノ中間ニ横ハリテ土俗之ヲ古隅田河ト呼ブ所アリシカド今ハ遂ニ涸田村ノ北方ニ残リ僅ニ埋シタル小流トなりしと又義経記ニ「頼朝公隅田河を越えて下総国より武蔵へ移りたまふ時二三日の雨ニ洪水岸を浸し軍勢を渡しかねたりき乃ハ武衛江戸太郎重長ニ仰せて浮橋を組ましめんとす重長詔して浮橋を作りて千葉介（常胤）葛西兵衛の両人江戸太郎を助けて知行所今井、栗川、かめなし、うしまと申す所より海人の釣舟を多くのぼせ江戸太郎が知行所なりける石濱にて折節西国船の着きたるを数千艘集めて三日の内に浮橋を組みてければ佐殿神妙なりと仰せられ太井隅田をこそ越えたまひけれ」トアリ是等ニ由テ考フルニ昔ハ向島辺ニハ数多ノ「デルタ」アリテ西岸一帯ノ地ハ石濱ト云フ海濱ナリシカハ交通運輸ノ便利モヨク随テ其地モ繁昌セシナラン斯ク考フルニ於テハ当時ノ石濱ト今ノ東京トハ地形上甚タ相似タル位置ニアリシ者ヲ想像シ得ル故当時ニ於テハ今ノ東京辺ハ片田舎ニテ只石濱ノミ繁昌セシ理由ヲ釈解スルニ苦シマザルベシ而シテ三河島辺

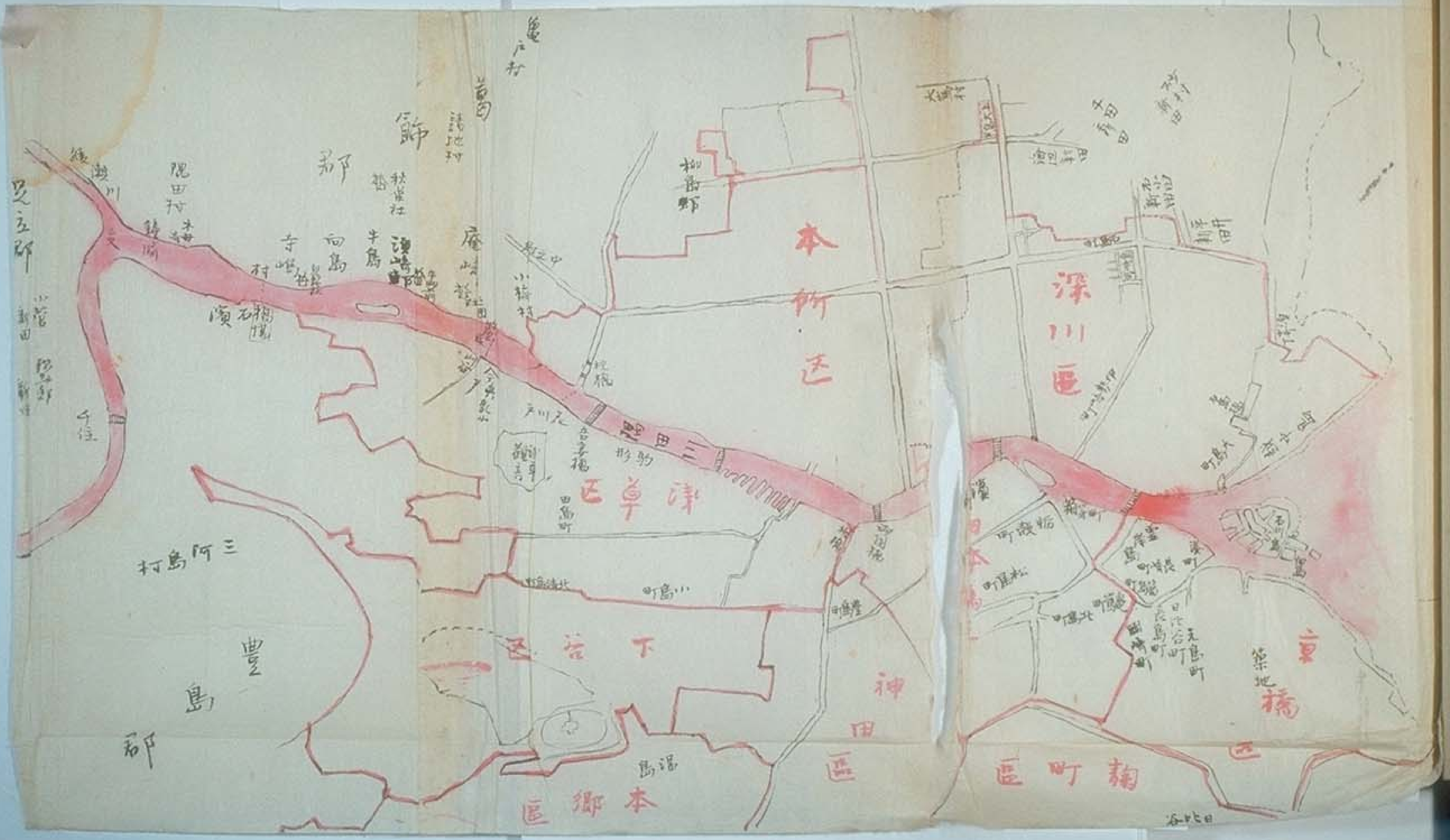
七艸集　子規稿

村モアリタレノ遺跡ナリセハ在濱ノ地モ其以前ハ海ナリシ事疑フヘカラズ其
ヨリ以前ノ事ハ其ヨリ以上ノ地ハ如何ニアリシカ今日ヨリ推測スル
能ハズト雖モ兎ニ角数百年前ニハ今ノ東京湾ハ一層深クシテ千住
アタリ迄入込ミ居シナルベシ然レ共年月ノ久シキ漸ク変遷シテ終ニ
今日ノ形勢トナリシ者ナレバ今後迚モ猶益々泥沙ヲ流出シテ止マズトセバ
幾百年ノ後ニハ東京湾全ク陸トナルノ日アルヲ期スベキ也又桑滄ノ
変自然ノ力ガ時モ働キテ止メズ一瞬又一瞬此界世ヲ変シテ新世
界トナス一部ヲ知ツテ全部ヲ推スル時ハ蠢爾タル人間豈驚キテ又驚カ
ザルヲ得ンヤ
以上論セシ所ノ向島辺ノ海ナリシトノ説ハ古来ヨリ之ヲ云フ者多シ
ソハ旧記ニヨリテ調ベナバ猶一層分明ナルベケレド余未ダ之ニ従事スルニ
遑アラズ已ムヲ得ズ他ノ論旨ヲ取リ地名ニヨリテ以テ之ヲ証スルコトト
セリ其證據ノ確固タラザルハ云フ迄モナケレド東京近地ニ斯ク許多ノ
島名ヲ存セルヲ見レバ余ノ説モ強チ人ヲ欺ク者ニモ非ザルベシヨシ
其臆説ハ真ノ臆説ニシテ牽強附会ニ過ギズトスルモ其論点即チ局
面ノ変スル所或ハ却テ大方ノ一笑ヲ博スルニ足ラン歟

右一篇能ク穿テリ舊記ニ謂フ所ト大ニ異ナル無シ
数句日ノ遊暑間ニ此大問題大見識ヲ著述スル
蓋シ凡人ノ企及スヘカラザルモノ　嘆服ノ外ナシ　陳
以往憑為詩閑年々蔚透不意才思可畏也　坤

七艸集　子規稿

余之ヲ書シテ後日ナラズシテ地学雑誌ニ[illegible]隅田沿岸ノ
変遷ナル文章ヲ掲ゲテ以テ其詳細ヲ知ルヲ得タリ乃チ是レ
月ヒニ山ヲ出テ蛍火慨然タル[illegible]ナキヲ得ンヤ
[illegible]海識
又国文章ヲ読ミ[illegible]捺リシ所アリ余故ニ[illegible]多少ノ記憶ヲ添ゲ
レカドモ其記憶ハ記載ナルベキヤ否ヤ多少疑ナキ能ハザリシ何トナレバ道
灌ノ時代ニ[illegible]山ヨリ傍ガ海ナリトセバ僅ニ数百年ノ間ニ此大ナル
大ナル土地ノ現出セシバカリ(其庵ノ語記皆然リ)是レ迄[illegible]同誌ニ[illegible]町
謂[illegible]ノ昂ル起ニヨル者カ



本所区
深川区
浅草区
下谷区
神田区
本郷区
麹町区
京橋区
日本橋
豊島郡
三河島村
葛飾郡
亀戸村
向島
寺島
千住
築地

七艸集　子規稿

瞿麦乃巻

購入以前既ニ切抜カレアリタルモノナリ
昭和廿八年四月廿一日

第四齣　秋は風

「亦打山暮越行而廬崎乃角太河原爾独可毛将宿」
まして秋といへば昔より悲しき者と定めたらん様にて嗚呼
襟を披きて涼しといひし河風もそゞ肌にさえて何となう寂しく
さらしき思ひす見渡せし中洲の蘆はうらがれて、かりがねの夢路
護るべき影もなく待乳の森のいとうすくまぶるゝをつまし
いこれぞ立田姫は霜のたて露のぬきにて織りなせし錦なれ
嗚呼風さわぐ堤へ吹いて木の葉のはらはらと散りゆくは人の
身の上にくらべていとあはれなる

こゝは墨田の渡し場にて旅行く人の五人六人つどひきしが
渡し守はや舟のれといへば皆人舟に乗りて
渡るに折しも夕暮にて物さびし――きをりから向ひの岸に念仏の声聞
えければ行く人のあれは何の供養ぞやと問ふに舟人答へていふ様「あれは
つきのはじめなりし頃生れ[illegible]のとなる人一人の狂女すくふ来りて
舟に乗せよといふ顔をみるにひとりにつどひし童の菜摘ひよ物
狂ひよと許くきゞ狂女は声をうちたて
「気違ひといふ者ぞ物に狂ふは許されよ縁に桜の物狂ひは嵐に
ゆの物ぞとは菜摘に蝶の物狂ひ三つの模様をめぐりくいとし
我子にあはせよやな

と叫ぶぞ「何やらしの物狂ひよ其の舟のせまいぞする狂ふかあへ
て舟中にく物に狂ひのふな」とて舟に狂けの覚「何かふさのなからんを
さきしのなるやと問へて狂女答へく「われは京北白川の者なるが
思はざる外に一人子を人あき人に奪はれて遠き東へ下りしと聞く
より家をさすらひ出で十歳にかゝるその間絶えずそこへいりと尋
ねわれそれのと思ふ影はなし さりは世に何やらんやなれるふ
書かゝりて[illegible]と仰く思ひとしのつきのみしと泣きければ舟客
めでぬ世にい騒[illegible]多かりしも向ふに中める紀村の[illegible]は都
梅若といふ二人の者と弟に為なるがその二人はかくしのこけありて
聞し隅田の渡を渡るなりけりその梅若とふしきとは

京のみやこそ昔は梅若といひしをさなごおぼろげに伝へありけりといふ
狂女は聞きしならん京のみやこ梅若はまれにそ我子によく似
たり生まれかくしかりける人かげはありせでたゞよふ我は聞きしならし
我は子を手引きせんそ狂女●を呼ぶ声まさしく其名つげ
梅若は狂女の子なりしをさなこなりて狂女はくるしめられひしかし
日頃夜毎にのりあるに乗りて念仏を十ぺんとなへ給ひし時
狂女の呼ひかけてあるなるにその長きは伝ふ母の人なりけり
ねんしは京業平はあの梅小梅の梅を出て聞ことを伝めけりて
再びもさしに伝りての舞ひ今ひの中よまり狂ふ
お家の事さん聞き知りてうつる気を傳へるまゝに白き鳥

のはしと足と赤き川のわたりに遊びたりこれは何鳥ぞと問ひ
ければ舟人答へける都鳥こゝよりこの鳥のこゝに来ければ
都の名はいとも古く人よんで都鳥といふなりといひける時
吟ずる舟は岸につきにけり業平は檣に立ちて見渡すに河のけ
しきは音なく舟の下に昔の思ひ出て

名にしおはゞいざこと問はん都鳥
我思ふ人はありやなしやと

と口ずさみつゝしばし立ちとまりぬ。これよりこの地を言問が岡
といひそめて後は業平町ともいへり。墨田川は都
鳥の名高くなりて今に伝へけるとぞ

七艸集　子規稿

七艸集
批評

Criticisms on "Nanakusa-shū"

七草集を讀み終へる君がわかきを羨す

おのれ去年の夏牛嶋の長命寺あたりにやどりしぬ。携へしかき

想ふことはおのづからしなくて、ひねもす内にこもりて机に向ひ居れば

わづらはしきまゝにそれがしもしなし。されど最早都に帰るべき

日も近づきしころ思ひ帰りて後、友どちの「日ゝ里なる耳に

語ひ都鳥を友として何をかなしつる向嶋の土産はありやな

しや」と問ひければ何と答へん。ひともなうらしききこえと思ひぬ

れど、おのれの思ひつゞくるを、詩歌種よりうるはしき花な

実の得るべき様もなし。されどもつたなき文をなすさふらん

まうけんと思ふよりの國より素人の即席料理は植ずば

七艸集　子規稿

百花の精味に飽きたる諸君子の口にかなふべくもあらず。されよ
りは日ざしを[redacted]へ、舞臺を廻す方少しは俳諧くさくにや
なるべけれど硯の水をまきちらし香華のさきに実ならせば花
を咲かせしは肥料の足らぬ培養によく生ひ立つべき様もなし
されば寂しき秋の草花はよく風情を失ひて蘭花
長くのびて見るかげもなき芳草の花は半で枯れて咲き揃を
ぶる女郎花のゆらゆらとして力なき。花なき尾花の花を
いろどれる。朝兒の腰かけやすきも、葛の花なきは、梓しるの香
もあらず時にかしこき眼をけがす。兎の糞もぬいかしなれど、基
こなたにも折角生ひ出し者なれども、さすがにぬきすてかねて其

まゝに残しおくものとおもふのみならん。さればては断りおくべ
きをくさくさいふなり。藤袴、女郎花[redacted]の二くさはまぎらはしきつくし
がたし。よくよく知らずして花を咲かせんとはいかにもはかなしとも
いはれぬ。枯れぬべきはなれども、きく園主の好奇心なればひとへに責めは
その種を致したるにあらん。朝顔は論ぜず論議にひたるまでにて全く
真のものと同しものなりにあらず。葛は古事記の昔を偏べしせ
でしく加減に蝶を呼ぶといふもなくもし蔵がれん又なし
これは小説の筆を加へたる、ものなり。[redacted]小説にはある
ずなし。併へども其の時代のものやりとしてそを然しからず
折るは言葉の勤めにして、あるがまゝにたゞくひ理にはかれんたゞ

るはいふまでもなけれどことならば眼目にあらねど其心して見
すゝんことをねがふ者なり。又はじめより此集を七草集
といふことのゆゑは去年の夏つくりしは五草そのうへ刈萱の
巻は七草の名なれば備はらぬを去年の末に葛の巻を作り足し
足りてやうやう揃ひしかす　子の巻をとゞめて其数だけはそろひたれども、
其なかみは疎なりたるまゝなりし　拙者の律にはづれる荒誕の
ことは世の君子たち一臂の力を惜まずして筆しきすがあしきを
なりをとがめよ。かくせずと、とこしなへにあすの笑ひ草
花は別にそへの竹を力に一日の命を延ぶることなしとせんや
願はくは広大の智恵と無量の慈悲を垂れたまへ　了

七草園の卿のうるさきまでに堪り得ぬ一凡夫の手ずさみの
花を折り添へや、君たち
明治廿二歳のはじめ二月のある日ついたちといふ日
真砂町常盤会寄宿舎の二階の窓に花散る
わくの若葉をながめながら雪霞の時をまちて

常規凡夫
志るす

七艸集　子規稿

第一巻蘭之巻

何處無山何處無水何處無風月之清涼明澈而加永州山水及赤壁風月皆唯得柳々蘇東二氏之筆而顯焉夫觀山水猶読書隨其見之高下如此巻記墨江小景筆々帯煙雲風霜且盡神奇灑脱之情所謂情景共至者乎墨江山水風月未必要柳々蘇東也

第二巻萩之巻

盡寫瀟洒之光景且寄耳目之感佳聯続出極精緻之巧試中如何島寸技多恨多情不可当余今記拙詩評此巻

七艸集　子規稿

嚴然永用掩柴関朝暮逐涼幾往還樹下茶鐺忘俗
事楼上書読占清閑櫓声破暁搗堞月煙雨涵昏叟
乳山此亦此景君閲去層々浮出筆硯間

第三巻女郎花之巻

七草の盛りを君の庭へすハ女郎花（おみなへし）の咲出しハいかで見つらん
なつかしとハ七草園の花盛りゆかしき香ハ袖に充ちつゝ
七草の中にひいづる女郎花見る人毎に心をぞ引く

第四巻尾花之巻

女郎花美事に尾花尾花も秋ぞ
短くも太きハ粟蔵の尾花かな

第五巻蕣之巻

予未知能敢此巻読去読来而不能評只驚君之龜（惜）能深。
慚予之不能。呵々

戊子九月念七日森川町の仮住居散りかゝる桜の若葉の影にて

笑天道士妄識

七艸集　子規稿

七草各異其趣或勁拔或綽約于景于情弄筆自在実墨堤一幅之畫圖如使人在其境觸其事鳴呼詞兄風流才子之罪不將死而不墮地獄矣

尊知

自笑仙史妄評

七艸集　子規稿

墨江堤
逍遥之情閑雅之趣掬得之于巻中
一編之七草集雖使余不禁遊情
七草園中有余之東道主人者
夫此編乎

朝皃之巻

余不知焉故不能評読去讀来只
恍然自失驚君之博聞耳

採花春史漫評

冨士見西行ハ西向キに在り言問團子ハ向ふ岸に在り花と
言へバ土手の並木ハ言ハでもの事、鶯鳴呼子てハ得意顔の
君子花を筆頭に成田屋あたりのみじめな七草、柿な
ら捨てられてハ猶不平もあるまじけれど不平をこらへかハら
が折と大なまのうとあり筆ければ者武文妹外に月雪や
立ふ佗物あり芭蕉翁も月なりしも真の夜花草色に調
ハずと詠み雪のためにハ去んで復色む其決心をあらハし
且ふ飛おや橋場今戸の朝烟ハ去も立ら髭鬚の森かくて

待乳の山と庵崎の寺の鐘が淵の青き水かけて上手の帆り
舟、中は陽氣に三味太鼓、節面白く山谷堀、押しなる
昔は瀬となりぬ、さきより長人見渡せば明日は三八の例乃釜
日是非來臨を仰ぎ奉るなど家居許り。右の方は俗は俗な
れど花川戸の侠客の昔忍ばせぬ。されども吾妻橋を眼界
となし駒形の君はなどは遠張りで済むべきならず、まして首尾の
松、三叉の流れは待つに及ばじ流してものをと。このあたりも
粋な小梅あれどもお前とわたしの其中乃郷あり人目憚の

河岸を辿りつ來れば花町の翡翠の道行、遠く風に
送られて聞ゆるは俗世界の狂歌、近く耳元にいる如
きは舟宿の歌の粋声、仙界とはいはん将た粋界とや
云ふべき岩戸神樂の其昔はいざ知らず新ら武藏野に人住みし
てより物語の種となり樂みの中心となる。ソコに住ひなるは
吾友人なる丈鬼子なり近き事は清見寺の閑居のを
さまり遠き例は琵琶湖の湄の物語り其幽邃と瀟灑とを
皆と眼ふしたる長命寺、桜の並あると兼ねて期ふる

ともあれば更眉に唾つけるも及ばざるべし蘭之巻を一
読して墨江の風光見るが如し香と紛ひ凝らしたるもし
一唐の墨は小生今ひしん地噫有難りの画とは……
萩の巻は蘭の巻の摘ぎ(ヌ)ぬ、コレデ今夜孫ハしさへよくば明
日のお芝居はタツプリお聞き合に花とすれど実の巻は蘭
風流男の心地留真。きりとそ礼くとも一角ゆきは一般枕
見ごたへ。女郎花の巻は買山人の千紫萬紅の小倉山。
人をして都しめば脳病の種となやなるん。尾花の巻は女

郎花のむすこ、十五の新造盛りに生みしと云ふ。されど
年若きながら活溌に仕事し沢山あれど持ち母の安心まで
蕣の巻は先づ癡佛殿司の該博なる子路きらり目先き
変りて依ッ怪妙的なるに栄枯盛衰は浮世の常態と申
すのみ一昔帰りし其有様とは情(ナサケ)なしく會ふは別れ
のはじめ。何處のたそに死ぬるやら、さの事を思ひ出
せば轉た凄花の念ある時もあり又思ひ返しては誠に愉快
ならずやとて又動を起すこともあり夢幻の夢は真に浮

七艸集　子規稿

[illegible]

世ハ夢幻の如し。荊萱の花ハさらふ諸子のタップリと評とこの
言へることをも下されたれどもハ別ニ寐言をつらねこそよけれ
彼の人（支那の所謂）の尋常の感情を有し物好きな
る子たまもこそいれぬ者とてハ碑おもむきも頗る嫉ける気味
おまとを得ず誰れも不才を好まん誰もかも情男子を
晉せん又妬ふ硯男子を求めんやつけても自笑仙史の
詩好ニ妙なり

梨の屋つぶて寐言

三七二十一年のとし　十月

冝椎柿壇主記

七艸集　子規稿

[illegible]

[illegible]其[illegible]光[illegible]を[illegible]秋の如く
[illegible]の[illegible]を見るが如く細[illegible]
[illegible]
[illegible]性情の力は之に一家
[illegible]光万丈の見るべき[illegible]大[illegible]
[illegible]
[illegible]李長吉の[illegible]
[illegible]

[illegible]
謫仙の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

七艸集　子規稿

趣意等はあらざるにあらねど又は篇目より
文は篇目の篇目なるべし　大人の評語は
殊更殊更なれども一つも當らず全
く是作者より殊更にす心は文の論に非ざ
きに由て筆を來れるも殊に未だ身の
異なることなど腹立しきの道理なり
ざらずとせず評の批評の論とは
とも見えず是にあらず其の義を大人は

大人の時にて其の事なりと思ひしにあらざらん
ざるに是非を知らずしてさすれど人はすべからず
三の批評者が眼を以て世の一般に從
ぐいはんは又謂はれなきことにあらざるべし
然れど余は一つもせず大人の心意に背きたる
世に立ちても人を見ることせずば大人に對
情の語をもて論するに足らず
然れども大人を敬ふは大人の情なる説

意をもちゐるのみにするにはあれど又色を賞ず
の姿香りなどさまざまなれど或は蟋蟀穴
にたりとて大様をも疎みもましくあやま
思ひたり

葉しの花

清絶

萩の花

河霽

女郎花の巻

并へさゝ志

尾花の巻

以てのうた志

あさかほの巻

入相の鐘

刈萱の[illegible]

其いづれもあく[illegible]もなり

夜かくて夏の残り多きに吹くやみ
常よりは聞きよけれ共目のいと細きに
なりつるをおもしろき秋草録
まくくる井家の大人を追ても尺せて
哉もせんとて筆にまかせぬ

寄ち 秋の王

七草集妄評

嗚呼正岡君ハ吾党ノ風流人ナル哉先
ニ夕ニ三伏ノ暑石牛道ニ帰ルノ時人ハ
酷熱ヲ避ケテ山陰ニ竹籠リ或ハ冷風ヲ追
フテ海濱ニ浴ス獨リ君ハ居リ墨堤ニ
トシ一日清閑一百仙ノ句ヲ作ル亦愉快ナラズヤ
著ス所ノ七草集蘭ニ始マリ刈萱ニ終ル
詩歌誹諧数百篇墨堤ノ勝景ヲ選ス

七艸集　子規稿

コトナシ」先日牧師数友ト七草園ニ遊ブ
風致閑雅天然ノ景ヲ模シテ人工ノ僞
直ヲ尋トセズ帰ル時人ニ語テ曰ク向島ノ
勝ハ七草園ニ在リト然ルニ今又七草集ヲ
見ル牧師復タ特ニ云ハントス向島ノ勝ハ
遷リテ七草集ニ在リト蓋シ君ガ向島ノ勝
ヲ以テ黄昏早暁ニアリト云フガ如キ実ニ其地
ニ住シテ其境ニ遊バザレバ何ゾ此妙言ヲ発ス

ルヲ得ンヤ耶馬渓ノ勝ハ頼氏ニ依テ著シ
鴫立澤ノ名ハ西行ニ依リ知ラル君ガ七草
集ナカリセバ誰カ墨堤ノ真味ヲ知ランヤ」
謹デ七草集ヲ拝読スルニ各篇其趣ヲ同フ
セズ蘭萩ノ二巻ハ詩妙仙ニ入リ而シテ能ク
實景ヲ寫ス女郎花尾花ノ二巻
ハ優柔温雅実景ト感情ト相半ス朝
顔ノ一篇ハ想像ニ出テヽ専ラ感情ヲ

寫出ス說起結局屈折連鎖甚巧妙ナリ
霄櫻ヲ讀ムノ處アレハ悽悲一層勝レリ清
妙ニ始マリ悽悲ニ終リ寫景ニ起リテ想像
ニ結ブ是レ物ノ順ナリ只惜ム刈萱ノ一篇
遂ニ終ヲ完フセザルヲ余巻頭ヨリ讀ミ起
シテ朝顔ニ至リ大呼シテ曰ク正岡君ノ妙
思爰ニ至ルカト刈萱ノ一篇ヲ讀ムニ及ンデ
大息シテ曰ク才子多ノ病君ノ腦患實ニ

君ヲシテ此惨憺ノ境ニ陷ラシムルカト噫（嗟）君過レリ
君過レリ君何ゾ雜（詳）解ノ愚筆ヲ取ルヤ
君ノ聰明ニシテ彼拙筆ニ出ヅ余ノ驚ク所ナリ
菅公ノ寃ハ霽レシテ天拜ノ山月清ク餘
光今尚鏡面ヲ照ス君何ゾ恩賜ノ御衣
ヲ拜セザル刈萱ノ幼芽踏レテ將ニ枯レシ
トス知ラズ他日人頭ヲ擡ゲ空間ノ明
月ヲ遮テ天際ニ横ハランコトヲ

大人の文章は女郎花とこそ
ねるよしの君ぞえあらし女
若きらや女の顔ぞ知ると見はん
これと其郷ぞしける霧ぞ針
さる若年々文大年女

ひやゝかにて解かれぬ
まことの情うせむ
然るとて
世をもあきまじ

十月廿日

棠陰牧師

天之賦人。何其不均。余疑之久矣。今於莞爾少年益見之也。蓋人各有天授之明鏡。本心即是也。蔽是鏡者其數多。則人間之妄想也。其支枝也。能斷其妄想者鮮于天下。莞爾少年蓋其一人哉。少年能研其賦与之鏡者乎。將受之于已明々皎々者乎。吾知其切磋之功至是焉。少年能斷諸根得其本体。故萬物之反射無一遺也。七草集所載。其趣[illegible]異。其言亦不同。蓋可謂能尽七草之性情者。或有目少年以沈妄想

之中心者。余不敢取之。嗚呼。君明鏡能反射萬象。君精識能編出之。君頭脳能消化之。君手君筆墨能導之。蓋筆公亦非昔日之毛穎氏。有鬚有髯明也。已讀七艸集。閉巻静思。以僕妄想評君本体。其奕可不啻一。

辱知　郡海青頓拝評

(蘭之巻)少年之文。蓋報柳欧于一臼。能丸之者也。

是故柳与欧一人而来。可以得其談。然若各独一而来。余知其不可不避一技也。

(萩之巻)詩添物茂卿者乎。皆来自深邃。而淡白。別無勇爽之状。蓋應莞爾老翁之作。其自云少年者。甚奇。然焉知非其知命之老更為少年耶。

(他巻)少年能詩能文能歌。多藝秀才。如蕣之巻。特見其工也。試雇天女来。語此一昳。使聴

者有精神静沈黙落。不知身之為一幽霊。
而白壁圓大入道林下出火玉足下生烟。
凍冷之手。引其身。誘一暗黒遙遙之地之
思也明矣。

辱知　青龍妄評

嗚呼何其多才多能哉僕惟驚嘆焉耳
又云僕初閲此巻甚才思之富饒而文華之巧雅愛読不能
解手秉興而施雌黄及巻末略曰評語掲之于巻尾白紙
奈何繁既施雌黄唯謝罪之外無他事
又云小品文殊妙而詩則僕之所家短故不敢評不圏不株
以俟他先生
國詩發句則僕亦嗜好之稗史小説亦少嗜之然如謡曲則未嘗
試之爾君之才想風流自天外来者甚可愛賞矣

（僕施句読）

柳谷胼漱妄評多罪

ちいさしと云へとふよしふしそらま
野の萩や造らぬまゝに風情なり
一くねり姿もやさし女郎花
そよ〳〵と涼し気見ゆる芒かな
蘼や摘見て濡れぬ袖はなし
刈萱の関は何処そ名のみある

恨みあき言の葉もなり葛の巻
本艸を皆書せし筆ついて
七草はおろか千艸も君ならは

瞠英庵

おのれハ正岡大人と同じ郷の生れなるを初めハいと
いと睦ましき友どちなりけれバ大人の人となりをバ
よく知りまゐらせて大人の文ハつねに讀み侍るをも知らぬ
されバ今までハ大人ハひろき文學の中にて何ものをぞ
深く極め玉ふ事ぞと何ともいはゞ言ひがたかりしを
まだ全く指をかぞふるものと何人と思ひめぐらすに
この七草集をみるにおよびて先づ己れの思ひ誤りたる
をバ全く打やぶりて大人の才ハそのはかりしらぬ高きで
はてもなく廣き文學の世界なぞおそしまれたびたび志
まるしきこの世界なとをなすぶきつゝめどいふを茶にまで

すゝみ玉へるを見ていとゞ打ち驚きぬおよそ文之
わざハ多くハ天性によるものにこそ學んでえべき
ものにもあらねどまたなんでもすゝむるやうなるにも
あらずまなべバまなぶほど進み行くものならし
いろいろと苦しき事を言はまりて大人の如きハ
かく己れに何といふをも天性ふくとみれバかくいはるゝ
治り玉へるハ他の學びのちにはあるなれバしかして
まだ幾何にもなつゝけなきにはや前より
いくもと大人ハ和歌をまなびてみなくに大人の
漢文をまなび玉へる程ハいと稀なれバ
茱の筆ハ漢文ハ景色をうつすに知の顔のみを

なきで只神を描き出せしわざのいと優れたるなる
或者ハ字句の間にまで疎複浅陋のところ有り
見ゆる盤のあすかなる瑕といはれん萩の巻の詩ハ大人
此切なるところより者みへる道うて大人ハ他のみならず
多くの人力を詩に用ひ玉ひたる玉なるべしときこえたりおのれ
のみて解にくるれバ詩天郷（和歌）なれ玉ひし漢文よりも目のうち
ふさぎたるあらずやと見えほどなる利おのれ此目のゆゑ
なる事かなけれバ大人の才乃文に適ひて詩にハかなはず
少や女郎花の巻を度々の巻といおのれの情みなきさ
道うて評（さざ）めむるじくもきこえなれバ何事にもいそぎやみ

大人ハさきの半紙の終りの端にのちにめでたき蕣の巻花の両巻
ハ初学とハいひきとるれども玉ひしもおのきハすの二巻ハ
或ひハ蕣萩の二巻よりも精しハせざるやと思ふハこの度
（真の理想）蕣の巻ばかりそハ前の批評書をいくてき
大人の読にてあらハ葛ちの如く言葉の米まきて又座
なるハ生ゆのよるみずかなきにあらそおのれハ大の蕣の
ます郷に六草の中ハ見きめ居るなる楽なりしこと藤葛
の巻を議論関到にかきまうてすつきされどなく（Cascade）
（turning power of river）にのみまで論をたて玉へる様なれど
（Gradual elevation）なとを詳しく与へて力を事へくれバ
さのみ玉を一二句書きてまへ玉ふそハめぐりおれ大人の前置

此巻を刪り玉へるハいと〳〵見まほしく思ひまゐらせしかど
去年の巻の近き年ちかき章篇を終り玉ひしこそあれど
我くし兵みに侍ち侍るにおのれハ洋文さへなき文
ハすこし書きなしたれど和文ハされ早で習ひしと
聞えハ何のよし 近頃 思ふ所ありて
まゐらせし妙なる思ひよりて折々の半紙にも書けれど
いと拙きを見せ奉らず批評などさかしきことを書き
ちらしぬ みむ人あなかしこ とがめ給ふべくもなし
なよ
明治廿にあまり二つの年 卯月の中ばすぎ 青山にて

うすゝすまゐかな
無姓氏綠樣主人妄評

なでしこの巻評

第一第二くの中に時代に付きて後日の文わかりたし然すれば
観察の手紙なとの最後読むまでは其世につくりて読む人
多かるべし
工匠を呼して船を造るの一句そはやおおかの最期ありける
やのあらはれたし
廿一枚裏二行目「ばかりけれども」しるしの字に改めて時代
わが違ひよく知らしき様に思はる
廿二枚目一人の文体を少し改へて直ふべし
最もし筆に力を入れて候へでもよしなたい
昔の役者は世の人より下等の者として扱はれ居りしを御論なり

又昔の小説家は「[illegible]出でて」なとといふを下品なる俳
優の仕事とし学者ずる昔の小説にありし吹へば調ある
所なきを云ふをば多く学者の口の云ふまゝの文
句とし
又第二編と第三編といふ時代がおなじ様に思はるゝむ
為しきは

野暮書生
瑞書生拝

小生
手討にする
あそびをする
くまでぱ
評

詞兄之文情優而辭寡詩秀超逸脫
以神韻勝惟間有蕪句蹈襲
是其微瑕耳須兄之字且先整字法
諸篇其校不敢贅其若韻語漢詩
余解且無覺乎之況寶況讀之身切
超以墨江月之癡人夢語是情帯

歷々在目予雖從人家在忘解乃不惑
而吾也蕪雜則筆意博慨乏
亦自喜讀去不覺聯綴嗚呼
天地一大劇場也人生如夢
然夢中嫌雜聲色俳優能泣
人使理法寫常知是假想然人
能覺發境之情況極身其境界

於是乎柳人事之變異論之
遷注雜其真僞易知其言之十
年之後再把墨江追懷往昔恒
先之假爲今之昔之幻爲今之實
後細顧望感極而泣之者乎哉
又自知其之杳雲目睫雲之下不勝今昔

々感作詩而阿花忽々若失棒詩
浴因有字哉萬篇則一氣奔
放縦横叙去意毛並難滔々依
議論亦新特僕輩所不能夢
視至豊夢々篇則自謂實
得至稗史小説細大無遺洪纖
不漏遂成焉而標自家胸臆
可謂巧矣不知吾兄找課之餘
而暇綽々能如此僕天資陋劣
加疎懶乏風趣趨逐于紅塵
程凡流韻事蕩然一掃
愧于吾兄甚多矣則莫之篇

詩存印文無焉思丕才思
富贍一唾之珠故割愛不顧其
可惜可惜者人或云了若聳
惜夫紫花月如無限月色園理
補以詩刻筆鳥之印子不醉如也 目均
一讀知其人能文郷者無能言譽

武而之大夢七句帯皆黒趣
只好粗之七草不同粱女脆不至
其沼澗傍以離翔而微風甚也
之子壹路一中提妻歎之擬詩
如人抱玉之靈園如之勇隣
幸還稱以批漱頓首
附記

供
劉覺僕固不解詩故所作
粗笨生硬可笑然無一塩與
兩師座右以爲何如美哉不醜
前醜僕嘗謂敢傲頼
無似妍而施之文耳

青袍幾閲帝京秋、酒點涙痕憶少遊
故國烟花空一夢、不耐他郷寫客愁

幾年寒夜痴風流、好傍江頭看月樓
夢緑荒蕪冷江上、爲盡生涯遂數白鬚秋

江東避俗養天真、一代風流餞逝春
誰知今日惜春客、却是當年剪燭人

艷骨化成塚上苔　千今江上杜鵑哀　憐
君多病多情処　偏吊梅児薄命来

長隄尽処又長隄　桜樹枝連柳樹枝
此裡風光君独有　六句只遺百篇詩

洛羅徴吟数枕函　江楼日夜月光合
怨君此際借書去　漫数黄梅一二三

洗尽塵懐忘我物　只看窓外古松欝
乾坤深夜闃無声　黙坐空房如古仏

京客多情教宿謡　美人有涙満叉湖
香雲艶骨両茫懐　片月長高羽枕橋

長命寺中鬻餅家　当垆少女美如花
芳姿一段可憐処　別後思君紅涙加

批評聞き書き

おのれ批評をけおとしせず諸君のいふが儘にはあらで
えらぶ事借りるかのいに選びしせず是非に批評して
これ人と文理に従すとも かゝる中に四めてくさきもし
あり魚くいそしなるふうふ離れたしはくさうを
かくせよとの うの字いはれなりとのくらいふ評を揮し
却て口にそ評しても くるゞ読る字をゆくふ時は直して
者への字にありありきたりそれなし矢張本邦風の金
嗜多のゝ方多きは報り組きあに報道なりけれども最
少しは獲物に評する人の方なりんとを願ふなりんぞ之

明治己丑五月念五日

辱知

漱石妄批

七艸集　子規稿

中にいたるまでたゞ評しておのれは口に第幾よりも正直
なりと略言せんとす
多くの人は之を評して該博といひまたは古雅といひ
せるもの多し或る人おのれに謂て曰く君は芭蕉に達せ
ふるといへども或は芭蕉を知らずといふべし是れ惜むべし
一赦ならずしと乗すべからざることもあらむおのれ深く之を服膺して
匡諭に遇ふは桃太郎の如しと思へり（おのれを義経
に比するは以て怖しといふ筆者なればなり）
余二三の人に向ひて大略ならば「七草中すへきもの
取るべきは幾ありと思ひ其中に第一は何なるや」と問ひしに
皆芭蕉の巻とぞ答へり其顛は蘭之巻といふ者と
ありたり

或人曰く瞿麦の巻の第二齣の都の打揚を
第一とすべし修り生娘のまゝなり
ある人曰く小説にはなきしこの巻の二十の意にかゝる
趣ぐ竹の子をとらるゝ所の様はいはれたらし
或る人曰くなでしこの第三齣は何とか如くしてもいひたし
ある人又曰く拵へるの巻は古事に拘泥せずして
時を去る一の節の主となる小説とあてはめたし
ある人のいふ拵へる巻は第四回を最佳とす
此の人のいふ第四回と第三回の終りとは最も
ところし第四回のけぢめの所を叙する所殊に佳し）

又ある人のいふやうこの集は我輩の俗乃最好の一
言にて人をして絶倒せしむ
某氏は云ふアルケミーと云ふと云ふが如きは理窟のいかなる
ことをいふにやしらじ
又いふ静ゆふと都とを比するは不適当なり
ある人葛の葉の地図を見て笑ふそいし謹
と思ふもの亦物すきなる人かな
ある人いふ世の中いきるくやしきのみならんなあをとこし
と人ま誇ぶ人もありけり

色身情佛まうつく

拝啓仕候貴著七草集恩借再三再四拝読仕候ハ以ことなが
ら法筆ものの俗感歎の外無之候珠になそしこの巻の法傑作
一入感入申候流石ハ日頃法情好ニ被相成候丈ニ御著作も断じく
まづニ見事後世迄恐らくは逢ヶ拝借の御ニ批評せよと
の御言葉に有之候中ニ小生等の歌をのべよとも要もなく候ニ
二三氏の評言に有之ニ事故小生ハ別ニ何も申上る事も無之
失敬し論評の際ニ幾つかし事一ツ二ツ有之候何共
のみ申上て御礼の印と致し候
先づ全篇の脚色ハ上出来と申す外無之これ迄ふくそ
漸常ニ法思考の結果ふと考へ候も何となれバ七草集の一部
ふ於短篇のことのでなくてハ……兎角長く成り易い……
如何しても……と云ふ法思考バの軽峰眼中ニ充満して遂

此小説を生じ出せしものなれば面白からずして趣向あるべき筈なり
此脚色を用ひて此小説上出来と為りして二冊に長く相成り
ゆゑに少しは批評の場所も出来しならんと存じ候へ（強ひて言
へば第三齣夏の雨の所に都の履歴を書き立てて甚だ不早達
千葉類葉の長々しき事状あるは少しも作りし思ふ所と言ふもの
履歴を何とか別に工夫するがよろしく類葉めいたる事状詳に
少し変化せしめたらん心地す然らざれば此齣の色彩は叙事体に
文章とて埋もれ居る故頗る優しきを免れず。さりながら全篇
四冊の小説故詳しき方なき事と承れば之れ迄なる
また文章に於て一言せんに頗る面白味ある文体なり唯だ字句
変化 Variety の多き文章にて或は通常の小説風（字句変化
風）のところもあれども或は非常に東京ものあり或は hum を

用ゐる事も多く或は第四齣の如きは俄に和文めきそれ而して[illegible]く　刪
恰も「都のつと」の如き文体なるを当時甚だ耶蘇に類して之を言へば
されども最初の二冊と終りの二冊とは執筆の時代が半年も違ひ
いたせりと思ひ候
是より形容に写らん形容は一々之を評するの暇なし只其一二を
言はんに一枚裏表の三四行の辺は少し物足らぬ心地す又二枚の
裏表面に「貞の色の白さ雪も中々及ばぬべく」と言ふは形容としては
形容過ぎたるものなり雪より白き顔のあるべしとも思へず昔の
作者ならば兎も角も今日の小説社会即ち学問ある人を客とする小説社
会にては如此形容は必ずしも此の類のことも所謂小説の改良中の
一部分なるべし形容のことはあっさりと自然に任せて今一つ例を
言はば廿枚の裏表に大雨は盆を傾けてと面白味なくは只ワイワイと

七艸集　子規稿

誦まずして　ちらちらとさして来る様子」といふ句もの形容甚だしく
ありながら見えざるものは兎に角に三箇月に形容して甚だ迂遠し
その中にあるべし　さりとては只に昔より今もといへども大抵を
形容詩をまねばずして紀事に流し[redacted]驕ざれ形容
するに足るものが故に複雑の間にあり　都の端にあるなり（十七字の違
ひ）するを十七字の表面にて「ねいけや湖汀離りて舟をおつさず波の
静もなく四方はことと静まり居れども」とあるは前後顛倒
事実にあるまじき事なれども此句は「四方静まり」云々の字を読む
時は此の如き句は消ゆるものなり　句は概もの形容の
妙はあるにあらず大概しけりと紀りにつきて尚雪もの様子
ありしを見る如くは他者鉢りに深く思ひ入ることを用ふ
に申すものあらん乎

最後に最一ツ言ひ添ふる事は「しくまで」氏の評して云ふる如く「野暮臭し」
端書きはなきにて」の二句は誰も月のつく欠点といふべし　又全氏の言
へる如く時代につまらぬ説明があれば此上なき事なれども此を思ふに
強ち無くては可なるん乎何となれば形容の上詩歌の意を読
むまでに世を思ふ者はしくまで其の外にはなきなるべし何となれば
三葉の表おもかげが芭蕉平に逢ひし時に芭蕉翁に遇ひし法を
せしならずや以て其時代も知るに足るべければなり
全編既に良妙なり故に良きところを揚げて之を明むるに在
らず実にあしきこと（ましき其に一なるあしきことあるなれば）を探
りて之を揚ぐる方まされるなるべし而して但其の病を得ること
前なくにあらん乎故に此は只もれず悼しまず誦読の際につまし
点を述べて僅かのみ其罪深かるべしといへども君の寛大なる御容

悲を希望するの園より一毛の郷見ん其篇ふさるまで深く然を
知れ要すれは七草集皆艶麗清絶君が固有の天才と学識
を表出して花を開かせたるもの多才多能感服の外なし
所謂長袖能く舞ひ多銭能く買ふものか賢
蒋平頭をおさへながら台町寓居の
窓の下に筆を採りて

笑天居士妄識

丈鬼雅兄
梧下

南塘先生口評　色身情佛筆記

一株に古事を取り集めたる趣向よし併し一々論すれは
なをしくの花
じあしきぶりすくなからず
第一齣そへものの文よろし
二枚表何の用事があつての一説は削るべし
同裏「もしや」といふ言葉の用ひやう
三枚表「滋味ありて」といふもあらしの様
東京言葉は総て違ひたるが多し
四枚表鋳りそへりて稿本の見苑を清めらるべし
同裏「思ひきつて」の一語は何ぞや
五枚裏世の文学世風の議論あまり新よし（一笑）

須お宮の物語や業平より其物語を仮する方宜しかるべし
六枚目「琳を傾く」の一句はお宮のしふかたなきものならず
田裡星の都はまさに解し難し
第二句のうちあふに依壽を生じて晴れ舟次郎を出す仮なれども係
る米はさし出しなる方面白し
七枚童兒男妙利といふ夜對の言葉なしみずや
八枚童兒野暮者生もの一句なしるべしあれども却て面白し
第二句作り「目ぐるまき」を惜しむの方にこそ論語頼兼ぬ詩作
伏線なるべし
第三句は詩の面白あり[redacted]絶えて詩の讃多ししかれば芳ふさなれ
前後を結びつかずその世に評判の悪るからぬなしかるべし
以て趣向をかへ頼兼出て都を廻び都話を舟を乃ちなし　水中

に前ち其生死も知れずとする方よろしからん
長兵衛の梅若を殺す方は新可なれども此句は殊更に長兵
衛を出すに及ばず それよりは矢張折葉の盗臣とする方穏なり
鐘舟を工夫するといふ面白からぬ趣向なり
業平梅若の二人を其中の宮殿呼び方をかへたる変模めて面
白し 芭蕉なし少し 変へてよりし高徳の代りに名を伝聴を
路の字要何も必要もなき様なれ[redacted]し それよりは祝の花を好むと
なる際に陸奥しても白（かね）との何とかする様なるべし
第五句のけずのにおほきと業平の名付及び其譲れたる名をさし
埒の文字て叙してよびたし
面白きを生じたる一段は面白し
廿枚表より裏にかけ鶯徳院の言葉は剥りたし

此精霊の実説は泊に叙し出るをよしとす
第四齣は古様にて尤宜し
胡女の前の事を直接に叙せずして船頭の物語とせしは妙
全篇を四齣に分け春夏秋冬の四季に配したるはよし
此巻の第一齣は当世の文章にて第二齣は春水の流亜なり
第三齣は昔の時代小説に似て第四齣は古き文章のまゝなり

坤不才不文詩不能窮致其一斑一況他文字乎尚為君之批評妄言
評蘭菊二品亦唯責塞之為何足言耶但君才思流出斜々堂皇
佳人拍案一笑不覚暑中之熱矣幸甚

明治廿二年九月十八日執筆於松山市千舟街上陋室
時秋暑如燬流汗濕衣
千舟居士

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぶまべく世の名はきゝすて文にも筆をなげたれども花の文はよみまゐらせ盲人なれは色も匂も見えぬながら古雅でおもしろき所々に謹書はおもしろきまで多く居りまいらせ候かしこ

江田鼎守

使盲者判五色乎天地茫々唯是暗黒
耳矣何識彼青黄与紫紅哉髦賦性
駑鈍浅識無學胸中即是盲矣焉亦能
弁七草之艶麗哉然辱得拝誦之榮豈
可不深謝其芳情耶諺曰盲者不恐蛇
敢妄言所思謹還璧必有指黄為紅指
青為紫者矣莫深咎則幸甚々々

蘭巻

墨江僑居記

先説寓于月香楼所以次叙楼之景勝中間隙朝々暮々所観之景所觸之感経以悔待人而獨遊之樂之論結局情景併得波瀾層々

記小景一

写出曉色模糊之状宛然如見

又云讀至于富山突兀掛金龍塔梢之句躍然欲舞不覚呼快哉

記小景二

先生健腕亦為炎熱疲矣乎

又云服先生改刪批評頗得我心

記小景三

軽々叙去不見難渋之体無限妙味存焉

才思可驚

記小景五

読之則身如在深山幽谷之裡何等清絶

記小景四

読至于此覚明花皎月為狂風痴雲所乱

記小景六

癡雲漸霽月漏光狂風忽収花改容
絶之子規詞藻富贍筆端生花矣何暇于
問字句之瑕瑾乎磨之以歳月不難
到韓柳欧蘇之堂勉焉

又云余始読此巻以為不足深賞也及再読
則少覚有佳味三読則大驚曰真錦繍之文
矣余何謗之甚邑誦読再四遂書曰奇思燦爛
文情秀拔

萩巻

僑居之作十四首中以其第六第七第十一
第十二及第十三為上乗而第七首最妙
第十三次之

附録比之前集覚大佳殊如次韻寄竹鞭
卿和笑天道士之什不見雕琢之色流麗
可喜何等奇才敬服

又云竹枝則河東先生之評盡之復須吾
輩之喋々

七艸集　子規稿

女郎花巻

余和歌を綴られば私と面白く覚ゆることの
とまらず列ねて大方の笑草となしぬ

「墨田川ながれの傍ほとりに三たびやそぢたる月をながめて一つな
「君なれや頼みの言のはん甚しきもめて写せし花の一枝
「細道の茅をわけてほそくすりむきあやしき草との花の蔭下に
「ちくちくとんぼさし出す額だに朝がほの花の上なる露そこはかと
「立ちよれば額にかけうつる亀の井の清き流れゆくも面白くもとおもふ

尾花巻

こゝに在りて此のゆふ友の呼びかはし鳴く
歌をよみ露に知られぬ我のみ
夕立や富士に知られしとえがく
夏の夜の夢のはかなき契りぞ吾妻橋
浮世とは川一節のながれにてのな
女郎花の名に知りそめし比隅田川花の名の
さへしは味なきてみなしあるは何もいそぞそれとも
思へば面白き様覚ゆることの多くて雑助の感あり
なをおこりぬれば前例になりて書きつくるうち

好尚多くまねびけれハこゝに一端をかゝけて
知らしむ

蕣花巻

古人ノ句ニ千年の月をくれふす宵哉ト余亦此
巻ニ於テ謂ハシト欲ス曰ク朝貌ハ七草の色奪ヒ
タリト実ニ秋花七篇中ノ出色ノ作ト云フベシ
鄙見ヲ以テスレハ瞿麦篇ノ如キ優ニシテ美ナルモノ
アレ氏全篇ノ結構辞句ノ排置文字ノ流麗富ニ
天淵ノミナラサルナリ徐ニけき」ト称スル者ノ如キ一層

ノ好致ヲ見ル蓋シ子規其ノ人ノ如キ之ヲ錦心繍
ロト云フヘキ耶

葛巻

一篇東都地誌之語華考議論精詳
考証確実不必言軽ト着筆平易流
暢而不渉冗長能中的理義満腹故
然焉耳感服
又云聞東都無清泉引玉川水充飲料
亦可以為昔時為三角嶋之証乎

瞿麥巻
諸先生之評尽之不敢添蛇足也
妄言無所不至死罪〃〃謝
明治二十二年九月廿二日夜
于鶺鴒巣　僻交
蟠松狂夫髭
謹識

余前既題蕪言　子規今又
使余題詩乃賦二律疎雜
雖甚聊以識所自甘也
門隔長江業九衢琴書成趣
小生涯從蘋莎抽水晴平渚
梧竹陰庵從古法裙欄茶無
醫骨（病）秋燈詩味送閑懐倩

來七艸於雲箋何識聲
譽壓等儕
擊節令人呼快哉快絶滿
紙續續雖只區區七艸集已
何啻三紅稍秀才詩愛梅
翁接道鄉之文宗曲叟出新
裁欽君藻思如江海更手
段擷衆美耳

梅翁指梅暾曲叟指
曲亭

明治二十二年十月念一日　松夷少史

七艸集　子規稿

[illegible]

七艸集　子規稿

IV,B
3-1
マ3

特別

和
94176
甲
28 3 23